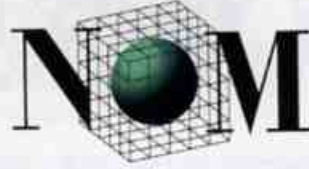


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第12号

1999.4

めくる楽しみ、手繰る楽しみ

誰でも子どもの頃、絵本を読んでもらったことがあると思います。たいていの絵本は子どものために作られたものですから、今ではすっかり遠ざかっている方もあるでしょうし、ご自分のお子さんのために、大人になってから再び絵本に接している方もあるでしょう。

絵本とは、絵と言葉が一体となって、場合によっては絵だけで、物語を表したものです。優れた絵本の絵は、各ページの絵がそれぞれ有機的に関わり合い、表紙から裏表紙まで全部を含めてひとつの世界を描き出します。ですから、文字を読まずにストーリーをたどることができ、ページをめくるたびに、生き生きと物語の展開を語るのです。挿絵のついた童話の本なども絵本と呼んでいる向きもあるようですが、絵本の絵は、分断された物語の一場面だけを描く文の添え物としての挿絵とは全く異なるものとして区別されるべきものです。

子どものための絵本が歴史の上で登場するのは、日本でもヨーロッパでも17世紀後半から18世紀の頃です。もともと、イギリスではそれが18世紀から19世紀に入って、教育思想の成立と相まって、子どものための絵本が豊かに発展したのに対し、日本で作られた菱川師宣ら浮世絵師による「赤本」と呼ばれた子どものために描かれた本は、そこで一旦途絶えてしまうのですが…。

しかし、「子どものための」という条件を取り除けば、日本の絵本—物語る絵—の歴史をさかのぼると、12世紀—平安時代に独自に成熟した絵巻にたどりつきます。絵巻は、日本美術を代表するものの一つで、日本独自の表現を持っています。

絵巻は、掛け軸と同じように紙を



加古世子「にんじんとけのり(パピペガ) 挿画より(部分) 1973年 徳成社

コンパクトに巻き取った卷子の形式を持っています。しかし、一度に全部広げて鑑賞することはせずに、手元で、右から左へ少しずつ広げ、見終わった部分はまた巻き取りながら見てゆきます。ですから、長い横画面に描かれた絵は、左からやってきて右へ去ってゆくわけです。見る人の視線は、物語の道筋に沿って絵を順番に追い、言葉を越えたストーリーを読みとり、物語の中に入り込んでゆくこととなります。

このように絵巻は、必然的に時間表現を伴う卷子という形式を持っていますが、そのほかにも当時興隆した物語文学や説話文学とも結びついて、様々な時間や動きの表現と、物語の展開に伴う空間表現を生み出しました。一つの場面に同じ人物の異なる動作を同時にいくつも描き込む「異時同図法」がその代表格です。絵が雄弁に物語る絵巻の頂点ともいえるべき『信貴山縁起絵巻』や『伴大納言絵詞』に見られる連続性やドラマ性は、優れた映画のような効果を持っています。

こうした連続性と躍動感に満ちた絵巻は、13世紀、14世紀となるにつれて、残念ながら少しずつ退潮します。絵巻はその後も作り続けられましたが、その流れの支流は、折り本形式の奈良絵本や赤本に形を変え、平安の絵巻が生んだ豊かに物語る絵の連続性は、失われてしまいます。そして明治に入って洋装本が輸入され、今の絵本が作られるようになります。そして現在の絵本の興隆に至

るのです。

現在の絵本は、洋装本の形をとっており、手繰る絵巻とはちがってページをめくっていくものです。それでも、見る人の視線の方向は右綴じの本なら右から左へ、左綴じならその逆方向へ動いてゆく、絵も文もそれを前提に方向性が定められています。また逆に、長大な画面を持つ絵巻もまた、漫然と長いのではなく、見る人が肩幅くらいの長さずつ巻広げては巻きおさめてゆくことを想定して描いているはずで

す。絵巻の絵の連続性や生き生きとした動勢はその歴史の中で一旦失われてしまったとはいえ、印刷技術が発達し容易に絵巻の複製等を見ることができた時代において、絵巻と共通点の多い絵本の絵を描くにあたり、絵巻に注目する画家や編集者がいないはずはありません。また、意識的ではなくても、絵が主体に物語を語る要素や、ページをめくる連続性と方向性などの中に、絵巻を生み出した日本人の感性が復活している絵本も、数多くあるように思われます。

絵巻を生んだ日本の土壌は、現代の絵本の表現を生み、そしてそれは少しずつ大人の視線をも惹きつけつつあるようです。今回の展覧会では、絵巻を源流として据えながら、絵本を主体にとりあげます。大人も子どもも一緒になって、物語る絵の豊かさを楽しんでいただきたいと思います。

(美術学芸員 宮下東子)



前田青暉(かぢか辰山) (部分) 1947年 東京国立近代美術館蔵

パリ・オランジュリー美術館展に向けて

平成11年7月10日(土)～9月12日(日)

「オレンジの温室」という意味を持つ「オランジュリー」という名は、その響きだけで明るく暖い南の光を呼び起こします。そのためでしょうか。この名前はしばしば宮殿の別館の愛称として現在に残され、ことに北の国々を旅している時など、思わぬ場所で憧れに満ちたこの名の建物に出会い、驚いてしまうことがあります。

それでも一般に「オランジュリー」というとパリの美術館を思い浮べる事が多いのは、ひとえに深い印象を与えるそのコレクションの力と言って良いでしょう。今ではこの建物は、ルーヴル宮殿の別館という本来の姿を越えて、ルーヴル美術館に隣接するオランジュリー美術館、としてパリを訪れる多くの人々の心を捉えているのです。

その関心の中心にあるのが、おそらくあの有名なモネの〈睡蓮の間〉であることは疑いありません。

8の字型の壁に描かれた睡蓮の池の連作は、まるでうつろいゆく時間そのものです。作品自体はもとより、自分を包み込んだ空間や、そこで過ごした時間が忘れられない、という人も少なくないのではないかと思います。

〈睡蓮の間〉に降りていくためには、一度、2階に上る必要があります。美術館の来館者は、まず階段の踊り場の周囲を取り巻くスーテンの作品を目にしながらいよいよ奥に進み、セザンヌからルノワールへと印象派の世界を心地よく遡った後、続くローランサンの部屋で階下へと降りることになります。

旅行中で時間が無い場合などには、脇目も降らずに一直線にこの階段を目指してしまうのも仕方ありません。ですが少し余裕を持って、2階の作品群を眺めることができたならば、そこに展開している近代美術の数々が、たとえばオルセー美術館などとは全く違った

発想で集められ、並べられていることに気づくことでしょう。作家で言えば、ピカソやマティスやモディリアーニを含む十数名の画家の名は、我々にもなじみの深いものばかり。時代的な位置づけで言えばオルセーとポンピドゥーの双方にまたがるような感じです。

しかしながらオランジュリーのコレクションから我々が受ける印象は、それら大美術館とはずいぶん違うのです。まず、作品のサイズはどちら



アンリ・ルソー (繪札) 1904-05年頃

かといえば小さめ。そして、並べられている作品群にはちょっとした“偏り”が伺えます。それは一種の“趣味”とも言い換えられるもので、この美術館の収蔵品が、ほぼ一つのコレクションから成り立っていることと関係しています。

コレクター、ジャン・ヴァルテルとポール・ギョームは同じ女性と前後して結婚したことによって、一つの豊かなコレクションに名を残しました。その意味では3人の美術愛好家の目、彼らの生活、そしてその時代が、ここに凝縮しているといってもいいでしょう。かつて王族たちが過ごした由緒ある建物の中に、今では1920年代の「趣味」が詰まっているわけです。特にポール・ギョームは、数々の無名の芸術家たちの発掘と援助に当たった人物であり、時代の空気を読んでいただけではなく、明らかにその一部を生み出し体現していました。

今度は極東の国に生きている我々が、そのコレクションを目にすることになります。時間と空間の軸はさらに錯綜し、新たにどのような夢が紡ぎ出されることになるのでしょうか。

(主任学芸員 佐々木奈美子)



ビエール・オーギュスト・ルノワール (ピアノを弾く少女たち) 1892年頃
©Photo RMN Paris, 1998

中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝 ～唐皇帝からの贈り物～

この展覧会は平成10年に開設された新潟と上海、西安を結ぶ定期航空路開設を記念して行われる特別展です。法門寺に納められていた国宝級の秘宝がまとめて一挙に公開されるのは世界で初めてです。

法門寺は陝西省西安市の西約120キロにあり、釈迦の指の骨「仏舍利」を供養する名刹として知られています。1981年の風雨により、以前より傾いていた塔が崩壊し、1987年再建に伴う塔基部の発掘調査が行われました。この際に地下石室の存在が明らかになり、今回展示される秘宝の数々が発見されたのです。

その昔、法門寺は唐王朝（618～907年）が成立したときから歴代の皇帝の厚い保護を受け、信仰のため仏に奉る豪華な奉納品が納められていました。しかし10世紀初めの反乱により唐王朝が滅亡すると、宝物は地下石室に封印され、人に知られることなく1100年以上もの永い眠りについたのでした。

本展覧会では同時に発掘された埋葬品リストが書かれた石板によって、初めて確認された幻の磁器「秘色青磁」、日本に伝来した喫茶法を今に伝える唐時代の茶道具、仏舍利が入っていた金銀の舍利容器、当時の唐皇帝の様子を偲ばせる華やかな金銀器など、法門寺出土の文物70件を中心に、唐代文化の精華による文物を加え120件によって展示致します。



《銀舍利函(銀鍍銀器)》唐



《秘色青磁(八棱瓶)》唐

平成10年度 新収蔵品

《世界の美術》

版画

- ◆ ジャック・カロ
《狩猟図》1620年頃・銅版画
《聖アントニウスの誘惑》1635年以前・銅版画
- ◆ エルンスト・バルラッハ
《神の変容》7枚組 1920～21年・木版画
- ◆ マックス・ベヒシュタイン
《われらの父よ（主の折り）》12枚+表紙
1921年・木版画、手彩色

彫刻

- ◆ オーギュスト・ロダン
《考える人》1880～81年・ブロンズ



オーギュスト・ロダン《考える人》

《日本の美術》

日本画

- ◆ 小野竹斎《委熟るる鳥》1917年・絹本着色
- ◆ 郷倉千穂《豊饒群雀》1928年・絹本着色、金泥
- ◆ 横山 操《峡》1959年・紙、墨

彫刻

- ◆ 小清水漸《Lapis Lazuli Garden》陶・ブロンズ・水
1989年（1992年に舟を再制作）



横山 操《峡》

《新潟の美術》

日本画

- ◆ 行田魁庵《鷺の図》江戸末期・紙本着色

工芸

- ◆ 原 益夫《エンドレス》1997年・銅、鍍金
《忒分の巻》1987年・銅、鍍金

平成11年度の催し

企画展

■4月24日(土)～5月23日(日) 時を紡ぐ ゆたかに語る 絵本と絵巻

絵本は、今や世代をこえて多くの人に親しまれています。質が高いといわれる日本の絵本の源流をたどると、独自の発展をとげた絵巻にたどりつきます。物語につれて展開する時間と動きの表現を、現代日本の絵本の原画を中心に、絵巻をまじえて紹介します。

■7月10日(土)～9月12日(日) パリ・オランジュリー美術館展

オランジュリー美術館はルーヴル美術館やオルセー美術館と並び、パリを訪れる日本人に最も人気のある美術館のひとつです。本展は、同館の珠玉の作品群から、セザンヌ14点、ルノワール17点を含む油彩画81点による充実した内容であり、その中の60余点が日本初公開です。

■9月25日(土)～11月23日(火) 中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝 ～唐皇帝からの贈り物～

平成10年に開設された新潟と西安の定期航空路を記念して行われる文化交流の展覧会です。展示内容は、1987年に法門寺の地下より発見された唐時代の金銀器・秘色青磁・仏舍利容器・宮廷茶器などで、この文物全体の紹介は世界初公開です。

■12月4日(土)～平成12年1月23日(日) 横山 操 展

横山操は新潟県吉田町出身で戦後の日本画壇に新風を吹き込んだ画家として知られています。本展は、東京国立近代美術館との共同企画であり、内容的にも大変充実した展覧会です。青年期から晩年期にいたる大作を中心に約80点で構成致します。

■平成12年2月19日(土)～3月26日(日) 群馬県立近代美術館コレクション展

群馬県と新潟県の美術館交流として行われる展覧会です。近代洋画の充実したコレクションを有している群馬県立近代美術館の代表作、ルノワール、ピカソ、ローランサン、モネ、シャガールなどの洋画作品を中心に展示致します。

新潟県民会館ギャラリーでの展覧会

■平成12年3月1日(水)～3月20日(月)

新潟の美術

第一線で活躍中の県出身作家を最新作を中心に紹介致します。

常設展

第1期 ■4月1日(木)～6月27日(日)

前期:4月1日(木)～5月16日(日)
後期:5月18日(火)～6月27日(日)

展示室1

新収蔵品を中心に

展示室2

ロダン〈考える人〉初公開

展示室3

前期:新収蔵品を中心に 後期:東海道五十三次

第2期 ■6月29日(火)～9月19日(日)

前期:6月29日(火)～8月8日(日)
後期:8月10日(火)～9月19日(日)

展示室1

前期:古径・麦畑とその周辺 後期:日本画の名品

展示室2

前期:ロダン〈考える人〉初公開 後期:特集ドイツ表現主義「コルヴィツとバルラッハ」

展示室3

1920年代の美術

第3期 ■9月23日(木)～12月26日(日)

前期:9月23日(木)～11月7日(日)
後期:11月9日(火)～12月26日(日)

展示室1

11/23まで 企画展開連展示室となります。

展示室2

12/1より 特集展示 横山 操

展示室3

特集 画家が見つめた海

ギャラリー

前期:ドニとナビ派の仲間たち 後期:1970年代の美術Ⅰ

第4期 ■平成12年1月4日(火)～3月26日(日)

前期:1月4日(火)～2月13日(日)
後期:2月15日(火)～3月26日(日)

展示室1

前期:特集展示 横山 操 後期:新潟の工芸と書

展示室2

特集 富岡惣一郎の雪 特集 アンドリュウ・ワイエス

展示室3

前期:1970年代の美術Ⅱ 後期:ゴヤ 戦争の惨禍

美術館友の会からのお知らせ

◎会員募集

新潟県立近代美術館友の会は、美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて、会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。

常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。現在、平成11年度の会員を募集しています。(会員期間は平成11年4月1日から翌年3月31日。)

◎開場式のご案内

絵本と絵巻展

4月23日(金)午後2時～

※当日は受付で会員証をご提示ください。

◎これからの催し

友の会作品鑑賞会:絵本と絵巻展

5月1日(土)午後2時～

エルミタージュ美術館をたずねる

芸術の都 Санкт-Петербург と

モスクワ8日間の旅

8月26日(木)～9月2日(木)

※各企画展の開場式、作品鑑賞会の日時および友の会事業の案内は、友の会日より等で随時お知らせします。

[問い合わせ先:友の会事務局 TEL.0258-28-4111]

利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

※ただし、5/3、8/2、10/11、1/10、3/20は開館、

5/6、10/12、11/3、21は振替休館。

および、9/20(月)～9/22(水)、12月27日(月)～

1/3(月)、3/27(月)～3/31(金)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(高校)・高校・高等専門学校……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮内町字屋敷278-14 940-2021

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

美術連話(12) 「川柳と狂歌」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

寒中雑書臥読の際に印象に残った箇所を抜書きしてみる。

「弁慶は滑稽(作り話)の男なり。むさし坊とつきたるは、弁の字を片仮名にて読めるなるべし。」これは大儒(大儒)伏見祖傳の随筆「南流別志」(1736年初刊)に見える考説で、さすが著者ならではの桐眼と感心する。

「五百年以来茶あり。百年以来烟草あり。世はようやく事多くなりぬ。仏老も古はなきなり」(同上)。日本文化の足し算の特長を突飛な事柄の組み合わせでうまく衝いている。

「南流別志」を批判した富士谷成章の「非南留別志」(1764年)にはこの條につき、「茶は五百年来にあらず。千年の余にもなれり」とコメントしているが、やや毛を吹いて蛇を求めた気味が強い。

次に京の医家橘春暉(南翁)の「北窓瑣談」(1825年初刊)中に

「江戸に一種の発句あり。その集を柳梅と名付く。甚だ卑俗にして文雅の人の弄ぶべきものに非ずといえども、よく人情の委曲に通じ世態の変化を述ること妙……一両句を挙ぐるに

居候魚けがすきじゃとたんと喰い
ともすれば二條の后すれ下がり」

「狂歌は昔よりあることにて…近来江戸盛んになりて、四方赤良(蜀山人)などを初め狂歌の名家甚だ多し。江戸の人(白鯉筋卯雲)の作なりとて人の語りしうちにふんどしの延び候という声は

われに夜這のふたり来るかも

一笑を發すべし。」

蛇足を付け加えると、二條の後の句は「伊勢物語」の芥川の段を踏まえたもの。折角背負ってまで連れ出した美女の思いの外の体重がさぞ優男に応えたであろうとの発想は秀逸である。類句に

やわやわと重味の掛かる芥川

がある。他方佐々木高綱と梶原景季の宇治川の先陣争いに見立てた狂歌の方は、同じく呼ばい(原婦)を扱いながら甚だ卑俗かつ端的な表現になっていて人を笑わせる。

ここで思い出すのは平戸侯松浦静山の「甲子夜話」(1821年起筆、全二百七十八巻)中に川柳点のことがよく話題にされていることである。

「川柳といえる点者あり。軽浮鄙猥のことながら、十七字の内に自在に含蓄したることを言いおおせたる手際は、



竹久夢二(黒猫屋)

その徒の右に出るものは非るべし」(巻四)。

「釈尊の教も、末に至れば律戒を保つこと能わず。川柳といえる点者の句に

大黒が鼠の衣縫っている都下の僧家、この類多きこととぞ聞ゆ」(巻十)。大黒とは梵妻(僧の妻)のこと。《弁天を大黒にし布袋にし》も同想の句であるが些か品がない。

川柳や狂歌の味説は老来何よりの愉しみである。こんな余得もある。もう十年余りも以前のことになるが、古川柳に若い女と黒猫との取り合わせを詠んだ句がいろいろあることに気付き、勞咳(肺結核)を患った妙齡の娘には黒猫を抱かせると快くなるという呪

があったことを知った。大正の画家竹久夢二の描く「黒船屋」のモチーフもまたまさにそれである。モデルの愛人笠井彦乃は肺を病み、絵が描かれた一年ほど後(大正9年1月)に世を去った。良く見ると画中の彼女はお歯黒を付けている。それはすでに画家の妻であることを示し、「猫よりも歯を真黒にするがよし」の句を地で行っていることが分る。江戸の迷信は大正期になお生きていたのであった。

夢二はこの絵のかたちをヴァン・ドンゲンの一画に求めたことが指摘されている。しかしもっと大切なのは猫との絡みである。この猫は絶対に黒猫でなければならぬのである。



ヴァン・ドンゲン(猫を抱く女)

表紙作品解説 オーギュスト・ロダン《考える人》1880~81年・ブロンズ

《考える人》はロダンの代名詞とも言える作品で、一般的によく知られています。この像は本来《地獄の門》の上部に組み込んで制作されたもので、後に単独の作品として独立したものです。

この1/2等身大こそが最初につくられたオリジナルサイズで、これをもとに縮小版や拡大版の制作が行われました。ロダン芸術特有の力強さと、内面的な精神性の両面が感じられる作品です。